

言葉を科学する：人間の再発見

Day 13

ちょっとだけ feedback

・Q: 言語が確立していなかった時代にも生得的に人間は意味機能の概念を持っていたのか。生得説支持者は人間の進化のどの過程で、生得的に概念を持つようになったと考えているのか。

*** 良い質問ですね。ホモサピエンスが誕生して以来、現在のヒトが生物学的にほとんど変化していないのと同様に、言語能力に関する生得的な資質も、現在の人類が誕生して以来、ほとんど変化していないという考え方があります。しかし、そのような現代的な意味での言語能力を獲得する以前に（ホモサピエンス以前の段階で）、何らかの意味概念など言語の前駆体が生得的な能力として存在していた可能性は十分に考えられると思います。**

・Q: 機能語の数は有限で、基本的に同じとは言えるものの、古文の文法と口語の文法が異なるように、長い時間をかけて変化したり作られたりする機能語もあるのではないかと。

*** 良い質問です。世界中の言語で、古い資料が残っているものを見ると、機能語も少しずつ変化していることがわかります。**

・Q: 機能語の意味概念を生得的に知っていて、生まれてから母語でどのように発音されているのかを学んでいくのなら、内容語の概念も生得的に知っていて、後から発音を学んでいる、と考えることはできないのだろうか？

*** 面白い質問です。基本的な意味概念、たとえば「手」だとか、「笑う」などという意味概念は、生得的である可能性が高いかもしれません。**

・Q: 意味機能の理解が生得的であることを証明するにはどうしたらよいのだろうか。遺伝子を解明するにしても、実験的に証明するにしても容易だとは思えない。

*** その通りですね。容易ではありません。さまざまな論拠を積み重ねて、その仮説の「確からしさ」を少しずつ高めていくというのが必要な方法です。そして、研究方法の技術や理論が進むに連れて、これまではできなかった調査・研究もできるようになるのではないかと思います。1つ注意しなければならないのは、科学研究においては、ある仮説を「証明」することはできません。これは全ての経験科学の分野でも同じことです。実験・観察、あるいは理論的な考察によって、その仮説を支持する論拠が得られた場合、その仮説の「確からしさ」がそれだけ高くなる、ということです。**

・Q: 子どもの言語（獲得）能力に関して、これまでも、生得的である、「身に付くようになってくる」という表現がでてきましたが、どういう意味でしょうか？本能みたいなことなのですか？母語がどの言語になっても、理解できるってということですか？「身に付くようになってきているんだよ」ということで、ごまかされているような気がします。

・「生まれながらその能力を持っている」と言ってしまうと何でも説明できてしまいそう。（ちょっとずるい？）

*** これはとても重要なポイントです。人間が持つ言語能力のある部分に関して、さまざま**

な観点から見て、生まれた後の「経験」から獲得されたとは考えにくい資質に関して、生得的な資質である可能性が高いという推論をするわけです。「本能」という言い方をしても良いと思います。ただし、「本能」のように見える資質に関して、研究者がまだ気が付いていない方法で、「経験による学習」である可能性もあります（逆に「経験による学習」のように見える資質が、実際には「本能」である可能性もあります）。したがって、常にそのことを念頭におきながら、研究を進めていく必要があります。

・Q: 内容語と機能語とは、きれいに分けられるものなのだろうか？内容語でありかつ機能語であるという単語は、存在しないのか？

* これはとても良い質問ですね。「内容語」「機能語」の定義にも大きくかかわってくる重要な問題です。歴史的な変化をみると、内容語であったものが機能語に変化したものもあるので、その両方の機能を担っていた時期があった可能性はあると思います。たとえば、英語の助動詞（機能語）の can は、歴史的には「知っている」という意味の一般動詞（内容語）でした。あるいは、日本語の「する」という表現は、「ある動作を意識的に行う」という意味の一般動詞（「野球を）する」など）であると同時に、名詞に付くことによってそれを動詞化する機能語として使われることもある（「証明する」「想像する」「チンする」など）と考えることもできるかもしれません。

<以下、質問ではありませんが、宿題に対して、とてもよいコメントがたくさんあったので、いくつか紹介します>

・いくら子供がすぐに聞いたことを忘れるからといっても、そのことが実験において子供に意味のないことを教えてもいいということにはならないのではないかと思います。とりわけ小さな子を対象にする実験なので、できる限りというよりは、まったく害（ここにおいては意味のない言葉）を教えるべきではないと思う。

・このメールを読む前、私は意味のない言葉を子供に教えるのは言語的に何らかの支障が出ると思っていたので、いきなり害はない、とあって驚いた。しかし、確かに使わない、あるいは聞かない言葉はすぐに忘れるものだとなんか納得した。特にどんどん言葉を覚える時期の子供は、必要なさそうな言葉はすぐに切り捨てて忘れてしまいそうだ。また、他人との会話の中で言葉を直していくという経験も分かる。あっているかわからない語を恐る恐る使って相手に直されたり、人の話を聞いているうちに言葉の正しい使い方がわかる、ということを私も経験したことがある。しかし、これは実際には存在しないヘンテコな語を少しだけ子供に教えた場合に限ると思う。以前の宿題の例の「ビフ」という言葉は「ビーフ」に似た語であり、牛肉とこんがらがってしまうかもしれない。この単語ひとつなら会話の中ですぐ訂正できるが、もしこのような既存の語に似たでたらめな単語をたくさん子供に教えたとなると、何が正しいか混乱してしまうことが考えられるのではないだろうか（一人の子供に複数単語を教える実験はしないと思うが）。

・確かにありえない単語を子供に教えても害はないと思う。この博士が言うように単語なんてすぐ忘れるし、その存在しえない単語は周りで話されないのだからなおさら覚えていないと思う。もし覚えていたとしても周りが訂正してくれたり、周りが話すそれを補う単語を覚える。こういった点でありえない単語を覚えることは生きる上では問題ない。しかし私が思うのはこのありえない単語を子供に教えるのは道徳的に良いのかということだ。実際、動物実験でもなく人を実験台にするのだから道徳的、社会的にまちがったことをわざと教えていいのかが問題になりうると思う。社会が認めるならばありえない単語を教えてもいいし、認めないならばこの実験はダメだと思う。

・倫理という概念は科学においては比較的新しいものだと思う。科学者は好奇心に従って思いのまま研究する集団から、社会というクライアントを持つことで、社会に対する責任を負う集団になってきた。その過程で、科学のカテゴリーが大きくなり、徐々に倫理というワードが生まれたのではないかと考えている。なので、科学実験における倫理とは、科学者の間に存在するものではなく、科学者が一構成員に過ぎない社会の中に存在する問題だとおもう。なので、科学研究に倫理について科学者だけを責めるのは間違いだし、また、倫理を宗教的な問題にすりかえるのもおかしいと感じる。